

1 May 2017

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan

Newsletter No. 16



知識税の時代から雑誌・挿絵の時代へ

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 初代会長 松村 昌家

1 知識税を越えて

サイモン・ハフの『英国書籍の挿絵画家と風刺画家事典, 1800-1914』(1978) や、フォレスト・リードの「一八六〇年代の挿絵画家たち」(Faber and Faber, 1928) によると、1860年代——正確には1855年から1870年までの15年間——は、ヴィクトリア朝における挿絵の黄金時代であった。

この現象は、もちろん19世紀における社会の進化に伴って、一般民衆が知識に渴望し、情報を求めるようになり、読書が生活の重要な部分を占めるようになったからである。

例えば、W.H. スミス (1792-1865) は、早くも1848年には、鉄道による新しい交通の発達に伴って、読書の需要が高まることを予知していた。そして1849年には、大衆向けの読切り物語を集めた『鉄道秘話文庫』を店頭に並べるようになっていた。——ちょうどディケンズが、鉄道小説第1号の『ドンビー父子』を出版したのと同じ頃である。

『ドンビー父子』のあとには『デイヴィッド・コパーフィールド』の分冊月刊がつづくのだが、それとほとんど並行して、彼は文芸週刊誌『ハウスホールド・ワーズ』を自らの主宰によって発行した。そしてその別冊付録として *The Household Narrative of Current Events* (以下『ハウスホールド・ナラティヴ』) を月刊で発行した。そしてこれが原因でディケンズは、違法の嫌疑で訴訟に巻き込まれることになる。

というのも『ハウスホールド・ナラティヴ』には、小説『荒涼館』に登場する悲惨な貧困少年ジョーのモデルになるジョージ・ルービーが生々しく描かれ、社会や政治・犯罪、事件等がリアリスティックに、また批判的に描き出されていたのである。そこで今日のわれわれにとっては甚だ理解し難い「知識税」(The Taxes on Knowledge) の問題が出来るのである。

その歴史は遠く、アン女王の時代 (在位 1665-1714) に発する。1712年、イギリス政府は、石鹼やリンネル等の輸入品に対して税を課すのと同様に印刷物・パンフレット、出版物 (特に新聞)、広告等にも課税することが制度化されていたのである。

しかしこれは序の口で、1798年からは新たな法令によって、出版物全般——とりわけ新聞に対して、厳格な締めつけが政策として行われるようになった。フランス革命のあと、政府は革命に対して神経質なまでに目を光らせるようになり、言論と情報をきびしく取り締まるようになったからである。

たとえば、新聞を発行する際には、まずその印刷者および発行者、そして所有者の氏名と住所を明らかにし、印刷局に宣誓供述書を提出しなければならなかった。違反した場合には100ポンドの罰金刑に処せられることに

なっていた。

『ハウスホールド・ナラティブ』1851年12月号所載の「法律と犯罪に関して」によると、1836年に新たに制定された新聞に関する規定条項は、次のような3項目から成っていた。

(1) 公的ニュース、情報(知識)、あるいは出来事を報ずるすべての印刷物。(2) 週に一度あるいはそれ以下の回数で、また26日を越えない間隔で発行され、専ら、あるいは主として広告を掲載するすべての印刷物。(以下略)。一見してわかるように、この時代には新聞(Newspaper)の概念も意味も明確に定まっていなかった。ほとんどアン女王時代の1712年に定められたことが踏襲されていたのである。

このように旧態依然たる法規のもとでディケンズは“Current Events”(最近の出来事の情報)を目的にした定期刊行物の発行に取りかかったのである。もちろん危険な目に逢うことは覚悟していたはずである。にもかかわらず、彼が『ハウスホールド・ナラティブ』を計画どおりの刊行に踏み切ったのは他でもない。「26日を超える間隔」をあける——つまり月刊にすることによって、新聞税法の網を免れることが可能であったからである。

『ハウスホールド・ナラティブ』1852年12月号の「法律と罪」(268-69頁)には、そのことが如実に現れている。すなわち、法務大臣が新聞印紙税の対象として断罪しようとしたのに対して、バロン(財務裁判所裁判官の称)は、むしろ弁護側に立って法務大臣と対決した。結果としてディケンズは無罪放免ということになったのである。

それから四年半後新聞印紙税廃止に関する国王の裁可が下された。そして『ハウスホールド・ナラティブ』は、その年の12月を以って廃刊となり、『ハウスホールド・ワーズ』は、1859年4月に、ディケンズ第2の主宰誌『オール・ザ・イヤ・ラウンド』と統合して再出発した。イギリスでは150種の雑誌がすでに刊行されていた頃のことであった。

2 挿絵画家の新星フレデリック・ウォーカー ——*Good Words*の挿絵画家として——

このような雑誌文化の隆盛が、事実上版画挿絵の発展を促したことから考えれば、1855年から1870年までの間は、まさに挿絵の黄金時代であった。特に1860年代から70年代にかけては、いわゆる貧民学校連合(The Ragged School Union)の活動が広がって、挿絵入りの読本や雑誌の需要は一段と高まった。

かくも多種多様な挿絵入り雑誌の代表格にあげられていたのが、創刊頃に*Once a Week*(1859-80)、*Good Words*(1860-1900)、*Cornhill Magazine*(1860-1900)であったが、歴史的・文化的な面で、あるいは日英関係の面からみて最も重きをなしていたのは、*Cornhill Magazine*であった。

サッカリーの編集によって創刊された格式の高い文学主体の月刊誌で、トロロープ、ギヤスケル、ジョージ・エリオット、ハーディらが作品を連載し、サッカリー最後の完成小説『フィリップの冒険』(1860-62)が連載された。

元来画家でもあったサッカリーは、この長編小説にも従来通りに自力で挿絵を添えるつもりであったが、年齢的に大型の挿絵には力量が及ばなくなっていた。版画家として名の通ったジョゼフ・スウェインや出版者としてサッカリーと馴染みの深いジョージ・スミスからの推奨で、フレデリック・ウォーカー(1840-75)が挿絵画家サッカリーの代理を勤めることになる。

イザベラ・リッチ(サッカリーの長女)によって書かれた『フィリップの冒険』序章には、「老齢で能力の落ちた画家」(サッカリーの自称)がいかに弱気の、若い画家フレッド・ウォーカーを全面的に信頼していたかを、実に細やかに、そしてユーモラスに再現している。

『コーンヒル・マガジン』で挿絵の登竜門を潜ったフレッド・ウォーカーは、J.E. ミレイ、ジョン・テニエル、ジョン・リーチ、チャールズ・キーンといった名だたる挿絵画家たちの仲間入りができるようになった。そして*Good Words*が1862年3月号に、ドーラ・グリーンウェルの詩「死における愛」(“Love in Death”)の再録を企画したときには、その挿絵画家として、フレッド・ウォーカーに白羽の矢が立てられたのである。

ドーラ・グリーンウェル(Dora Greenwell, 1821-81)といっても今では、すっかり埋もれてしまったが、ヴィクトリア時代には、詩集*Stories That Might be True, with Other Poems*(1850)の著者として、また社会問題に関するエッセイストとして、文学界に知られていた。ディケンズ主宰の『ハウスホールド・ワーズ』1850年4月4日号と9月7日号には、“The Railway Station”や“The Singers”などが掲載された記録が残っている。だが、私がグリーンウェルの詩集の中で最も注目したいのは、「死における愛」(“Love in Death”)である。それには冒頭に次のような伝説的な前書きがついているのに惹かれたからである。

1821年、赤児を抱いた一人の女がヴァーモント州のグリーン山脈を越える途中、激しい吹雪の中で倒れ死ん

だ。しかし胸に抱かれていた子どもの身体は、母親が一心に衣服でくるんでいたので、難を免れて、翌朝無事に救われた。

物語の舞台がヴァーモントに据えられているのを除けば、ジョージ・エリオットの『サイラス・マーナー』第12章に描かれた、モリー・ファーレンの死からエビーの誕生につながる情景にそっくりだ。

今まで述べてきた女たちの「行き倒れのパターン」を顧み、それが1850年から60年代において、一つの系譜を形成していたことを見ておくことにしよう。

「行き倒れ」(The Lost Path) の系譜

作品そのものの人気や偉大さからいえば、「行き倒れ」の筆頭は、『サイラス・マーナー』(1861)のモリー・ファーレンだろうが、その11年前1850年に、ドーラ・グリーンウェルによって、“Love in Death”が現れていたことを忘れてはならない。しかし注意すべきは、こちらが“Love in Death”であったのに対し、『サイラス・マーナー』に現れたモリーの行き倒れは、いわば“Vengeance in Death”(死における怨み)ともいべき特性をもっていたことだ。逆影響(inverse influence)の形になっているのが興味深い。そして『サイラス・マーナー』の一年後(1862)には、*Good Words*3月号によって「死における愛」(“Love in Death”)が再録され、フレッド・ウォーカーによる『行き倒れ』(*The Lost Path*)の挿絵(図)が全体を包括するようになるのである。

The Graphic, Vol. I (Dec. 25 1869) 所載の *The Lost Path*, “From a Picture by F. Walker” (図) は、そのことを見事に表象しているように思えるのである。



THE LOST PATH, FROM A PICTURE BY F. WALKER
The Graphic, December 25, 1869

奨学生物語におけるミドル・クラスへの復帰

東洋大学准教授 井上 美雪

ヴィクトリア朝期のイギリスでは、ロウワー・クラスやロウワー・ミドル・クラスの子弟が中等教育を受けようとする場合、小学校教育ののちに就労しつつ夜間学校や大学拡張講座などの各種成人教育機関で学ぶか、奨学金を獲得してミドル・クラス以上の子弟が学ぶグラマー・スクールやパブリック・スクールで学ぶしかなかった。それゆえ、奨学金は、奨学生に中等教育——場合によってはその先の高等教育——を与えることでより上方の階層へと移動させる教育階梯として論じられることが多く、階級間摩擦という苦しみを与えるものとされてきた。

本稿では、少年少女向けの小説に描かれた奨学金を検証して、従来あまり着目されてこなかったミドル・クラスへの復帰を描いた奨学金物語について明らかにしたい。ヴィクトリア朝期の少年少女向けの小説が奨学金を扱う場合、そのほとんどが教育階梯を登る奨学生を描いているように一見思われる。だが、代々のロウワー・クラスから身を興して教育階梯を登るといふ筋立ては、実際のところごく少数である。大多数の小説において、主人公は奨学金試験の直前か直後に父親を亡くし経済的な没落の瀬戸際に追いこまれたり、奨学生の親が実は裕福な家庭の出身者であることが中盤以降で明らかになる。つまり、現在は困窮しているものの、出身階級はもともとミドル・クラスであったという設定が多いのである。

例えば、Emma Leslie 著、Gall & Inglis 刊の *Elsie's Scholarship and Why She Surrendered It* (1898) では、奨学金試験を突破した主人公は、その直後に病弱だった父親が亡くなり、一家は未亡人となった母の生計に頼るしかなく窮状に陥る。だがこの母は、家族の反対を押し切ってクラークと駆け落ちをした裕福な家庭の出身であることが終盤で明かされる。あるいは、同じく Leslie が著し The Religious Tract Society から出版された *That Scholarship Boy* (1900) では、あるグラマー・スクールに初めて迎え入れられた奨学生には父親が海外在住で非常に切り詰めた生活を送っている様子が描かれているが、実は父親は医師で、悪友が当初から踏み倒す計画で借りた借金の保証人となったために財産を失っていたことが明らかになる。あるいは、H. Frederick Charles 著、The Religious Tract Society 刊の *Leslie's Scholarship; or, the Secret of Success* (1877) に登場する 2 人の奨学生のうち一人の父親は長年の病人であり、もう一人の父親は死去している。このように、奨学生は、親の世代でミドル・クラスから没落したか、何らかの事情で没落直前であるというパターンが数多く存在するのであり、こうした小説は、奨学金による階級の回復あるいは転落の防止を描いたものとして捉えることができる。

小説中の奨学金は、候補者の家庭事情や経済事情に配慮して受給が決定されるものとしては描かれていない。奨学生の家庭の経済状況が切迫しているため、奨学金は貧しい家庭の子弟に中等教育を与えるものだと思われるがちであるが、奨学生の選抜はメリトクラシーに基づいている。学内奨学金の場合、最優等の生徒に与えられるため、例えば The Sunday School Union より出版された G. H. Sargent 著の *Missing the Scholarship* (1887) では、奨学金は成績 1 位を勝ち取った裕福な家庭の出身者に与えられ、この奨学金を得られなければ家庭の経済事情ゆえに退学を余儀なくされる 2 位の学生は実際に退学してしまう（最終的には前者の不正行為が明らかになり後者に奨学金が与えられる）。あるいは、指定された地区の優秀な生徒に奨学金が与えられる場合、奨学生を自校から出すことは非常に名誉なことであったため、各校は学校内で成績により生徒を選抜して特訓を行い、その中で最も有望な者に奨学金試験受験の許可を与えていた様子が描かれている。前述の *Elsie's Scholarship* において、教員は、家庭の経済状況を考慮してではなく、学力を重視して受験を許可していた。

学力重視の選抜試験を突破するために必要だとされていたのは、生まれ持ったの才能ではなく、セルフ・ヘルプであった。例えば、*Leslie's Scholarship* では、当初主人公の Leslie は全力で勉強しておらず、彼の母は、“she had grave doubts of her son's success, not because she doubted his ability, but because she knew that his studies had been much more broken than usual.”と受け止め、“endeavouring to make him understand how important self-help was for him”と働きかける。

抽象的なセルフ・ヘルプ的美徳を具体的な受験対策に変換して合格する方法は、現実には広く共有されていた。ヴィクトリア朝期には、奨学金試験準備のためのガイドブックや過去問題集や通信教育教材や週刊誌が数多く発刊されており、システムティックに勉強を進めるための具体的なメソッドが公開されていた。例えば、Benson Clough 著、George Gill and Sons 刊の *Guide to the Scholarship Examination* (1890) は、身に着けるべき習慣として、忍耐、時間を守ること、早起き、集中すること、注意深くなること、正確さ、節制、判断力、適度な運動を挙げ、“To reduce study to a method, to become the creature of habit”こそが王道だと説いているが、このガイドの肝は、年間カリキュラムに基づいた具体的な 1 週間ごとの勉強計画を提案している点である。Thos. W. Berry

and J. H. J. Stringer 著、Simpkin, Marshall, Hamilton, Kent & Co. Ltd 刊の *The Student's Guide to the Queen's Scholarship Examination* (1897) では、“the value of having a *system* in one's study”が説かれ、メソッド通りに、いくつか挙げられた Time Table に従い勉強を進めるよう勧めている。奨学金試験対策が単純で具体的な勉強の指示に収束されたからこそ、奨学金はそれを勝ち取りたいという本人の意思の力を基に具体的な行動に移すことで手にできるというイメージが流布し、さきの Leslie の母親のような認識に結びついたのではないだろうか。

しかし、奨学生を扱った小説では、彼らが受験ガイドブックに記載されているシステムやメソッドを利用して勉強をする姿は一切描かれず、セルフ・ヘルプ的美徳を表す抽象的な言葉で勉強する姿勢が描かれることが多い。例えば *Elsie's Scholarship* では、“eager,” “diligence,” “steady,” “patient”な様子で勉強している。また、*That Scholarship Boy* では、奨学生をグラマー・スクールが受け入れるメリットとして、“studious”な奨学生が周囲の学生への刺激となることを挙げており、奨学生は単純作業としての勉強を指示通りにこなす者ではなく、抽象的な美徳としてのセルフ・ヘルプを実践する存在となっている。

セルフ・ヘルプ的美徳はミドル・クラスの価値観の最たるものであったことを考えると、奨学生を描いた物語の一つのパターンとして、ミドル・クラスから転落しそうな出身者がミドル・クラスの価値観を実践してミドル・クラスに復帰するという、徹底してミドル・クラスを志向した物語が存在していたと言えよう。ロウワー・クラスから身を興す奨学生のノンフィクションやフィクションがあった一方で、ミドル・クラスの世界で完結する奨学生物語があったことも覚えておきたい。

* * * * *

日本ヴィクトリア朝文化研究学会 2016 年度総会

日 時： 2016 年 11 月 26 日（土）17 時 45 分～18 時 場 所： 筑波大学東京キャンパス文京校舎 134 室

司 会： 佐藤和哉事務局長

議 題

【報告事項】

1. 2016 年度活動報告について

運営委員会（第 1 回 2016 年 8 月、第 2 回 2017 年 1 月（予定））

理事会（2016 年 11 月）

編集委員会（第 1 回 2016 年 2 月、第 2 回 2016 年 8 月）

2. 学会誌、ニューズレターについて

2016 年 5 月 *The Victorian Studies Society of Japan Newsletter* No. 15 発行

2016 年 11 月 『ヴィクトリア朝文化研究』(*Studies in Victorian Culture*) 第 14 号発行

3. 全国大会関係

2015 年 11 月 26 日 第 16 回 全国大会開催（筑波大学東京キャンパス文京校舎）

4. その他

2016 年 4 月 17 日 第 17 回大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集

新規入会者・退会者一覧（対象期間：2015 年 8 月 1 日から 2016 年 7 月末まで）

新規・再入会者 19 名、退会者 23 名

2016 年 8 月 5 日現在、会員数 332 名

【審議事項】

1. 2015 年度決算・監査

報告の通り了承された。

2. 2016 年度予算案

提案の通り了承された。

3. 役員交通費支給規定の改定

役員交通費支給について規定の改定が提案され、了承された。

4. 事務局員謝礼支給規定の整備

事務局員謝礼の支給について規定の整備が提案され、了承された。

5. 2017 年度の大会について

2017 年度大会は関西学院大学にて 2017 年 11 月 18 日（土）に開催される予定

6. その他

特になし

“第 17 回大会のお知らせと研究発表の募集”

第 17 回大会は、2017 年 11 月 18 日（土）に関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開かれる予定です。シンポジウムの題目は「南方熊楠から見たヴィクトリア朝——科学が編むネットワークと文学」〈仮題〉で、パネリストは川島昭夫（京都大学名誉教授）、田村義也（南方熊楠顕彰会学術部長、成城大学非常勤講師）、志村真幸（南方熊楠研究会運営委員、京都外国語大学非常勤講師）、小澤央（明治大学講師）の各氏の予定です。

ラウンドテーブルは「ヴィクトリア朝後期の少女雑誌——*Girl's Own Paper* をめぐって」〈仮題〉（提題者：川端有子氏・牟田由紀子氏）が予定されています。

特別講演は中島俊郎氏（甲南大学教授）をお願いすることになっています（題目未定）。どうぞ、振るってご参加ください。

研究発表（発表時間 30 分、質疑応答 15 分）を希望する会員は、発表要旨（400 字）に略歴（氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記）と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送で事務局までお送りいただくか、あるいは添付ファイルで学会のメールアドレスまでお送りください。メールの場合、送信後 3 日以内に受領確認の返信が届かない場合は、お手数ですが再送をお願いいたします。

応募の締切は 2017 年 7 月 5 日（水）必着です。

第 18 回全国大会シンポジウムおよびラウンドテーブルの企画募集

2018 年 11 月下旬に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第 18 回全国大会（開催場所と日時は今年の 8 月に決定される予定です）におけるシンポジウムおよびラウンドテーブルの企画を募集いたします。シンポジウム、ラウンドテーブル、それぞれ 2 時間 30 分程度（15 分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。締切は 2017 年 12 月末日必着といたします。シンポジウムおよびラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野をもつものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2018 年 1 月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

1. 応募締切：2017 年 12 月 31 日（土）必着
2. 申請方法：様式は問いません。下記に示す申請書必要記載事項を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までメールにてご提出ください。下記の「シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書（Excel 形式）」を利用いただいても結構です（<http://www.vssj.jp/conferences.html>/からダウンロードしてお使いください）。
3. 申請書必要記載事項
 - ① シンポジウム／ラウンドテーブルのタイトル
 - ② 趣旨（400 字程度）
 - ③ 企画立案者（氏名、所属、連絡先住所、電話番号、メールアドレス）
 - ④ プログラム
 - 1) 司会（氏名、所属）
 - 2) 報告者（氏名、所属）
 - 3) 各報告者の題目および報告要旨（200 字程度）
 - 4) タイムテーブル（全体で 2 時間 30 分程度〈休憩含む〉に収まるように計画してください）
4. 提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1 日本女子大学英文学科佐藤和哉研究室
Tel: 03-5981-3560 E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com

***** 編集後記 *****

今号では、新企画としまして、ヴィクトリア朝文化研究のパイオニアと若手によるエッセイ二編を掲載いたしました。玉稿をお寄せいただいた松村昌家先生と井上美雪先生には心よりお礼を申し上げます。また、お忙しいなか、会計報告等の情報ならびに大会に関する情報をお知らせいただきまし大島浩先生と佐藤和哉先生にも感謝いたします。

（市川 千恵子）

発行：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局
〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1
日本女子大学英文学科 佐藤和哉研究室
Tel: 03-5981-3560
E-mail: victorianstudies.japan@gmail.com
発効日：2017 年 5 月 1 日